

安楽寺だより

第13号

紙面内容

- 2面 本山報恩講に四十三名で参拝
- 3面 平成二十五年安楽寺法要日程
- 4面 仏教豆知識(六曜について)

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良
 名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇
 電話 〇五二(八四一)二六〇六

「心を込めて、おみがき」



安楽寺お世話方の皆様

あけましておめでとうございませう。
 真宗のお仏壇は、ご本尊の阿弥陀如来を美しく荘厳し、合掌・礼拝する場所です。お仏壇の前で、正信偈と和讃をお勤めすることによって、阿弥陀如来の「み教え」が自分の人生にとってこの上ない教えであると気付かされます。
 美しい荘厳は、お花・お華瓶・お仏供などのお飾りやお供えと共に、おみがきをすることで、お給仕を丁寧することの大切さを私たちに教えてくれます。

皆様の家のお仏壇にある真鍮(しんちゆう)の仏具と同じように、安楽寺の仏具のおみがきは、一年に六回お世話方の皆様(写真上)にやっていただいています。世話方の皆様が、寺の本堂に集まり、鶴亀(ローソク立て)や、輪灯・金香炉・花瓶・お仏飯器などを一つ一つ心を込めてみがいていただいています。
 皆様は、健康のこと、家族のこと、日頃の暮らしのことなどおしゃべりしながらおみがきに余念がありません。そして徐々に輝きが増していきます。

先日のおみがきの後でお聞きしました。
 「阿弥陀さまのおかげで、おみがきをさせていただき、喜んでいきます」「おみがきをすると、こんなに光るのかと、びっくりしています」
 「お寺のおみがきに参加して、家の仏具もおみがきをするようになりました」「おぼあちゃん、以前におみがきしていた大事さに気付きました」・・・
 おみがきを通して、さまざまつながりやひろがり生まれてくると感じました。
 また、毎年十一月の報恩講でお供えする(須)



お華束作りをする様子

弥盛)華東は、大変な労力がいらいます。お華東は、コメの粉から、お飾りに仕上げるまでに、お世話方など十数人の皆様が分担して、手際よく作業されるお姿(写真下)には、頭が下がります。

お寺の法要などの行事は、総代さんやお世話方などのご奉仕に支えられてはじめて、お勤めできることを改めて感じさせていただきました。ご一緒にお手伝いいただける方が、ございましたらお申し出ください。

本山報恩講参拝



大谷祖廟唐門前にて

昨年十一月二十五日、東本願寺報恩講にご門徒の皆様四十三名とご一緒に参拝いたしました。当日は、風の無い小春日和で、ゆったりとした気持ちでバスを降りました。修復中の御影堂門をくぐり、御影堂の大伽藍の前に立ちました。そして、全国のご門徒の皆様と共に、それぞれの想いをもって御影堂に入堂いたしました。

雅楽の響き渡る中、大谷暢顯門首の登高座が勤まり、その後「正信偈・御和讃」をご唱和いたしました。毎年勤まる本山の報恩講に今年も参拝出来たこと、皆様への感謝の気持ちでいっぱいでした。

四条通近くの百足屋で京料理をいただき

た後、親鸞聖人のお墓所である大谷祖廟に参拝いたしました。大谷祖廟のある東山界限には、円山公園や八坂神社・知恩院など紅葉の名所があり、観光客や家用車で大賑わいでした。祖廟職員の案内で境内各地を拝観いたしました。

その後、聖人が得度をお受けになられた青蓮院に参拝いたしました。青蓮院は、比叡山から平安時代末に移転された歴史のある寺院であり、庭の紅葉も真つ盛りで参拝の皆様もすばらしい景色に見入っておられました。

強く生きるとは？

坊守 吉田 滋代

昨年十一月二十三日、東別院で法話をさせていただきますました。勤労感謝の日「感謝」について、お話しさせていただきました。

暮れのお餅屋さんへ、ある青年がアルバイトできました。彼は夜遅く仕事の終わりに白に向かって「有難うね、有難うね、明日もよろしくね」と言っていたそうです。そつと聞いていたご主人は、仕事が辛く文句を言って辞めた人は沢山いたけれど、白に感謝するなんてと、感激され私に話してくださいました。その青年はアテネオリンピックにも出場され、現在は、競輪

の選手として活躍されています。

感謝し頭を下げるということを弱い人と思っっている方もあるかもしれませんが、それは誤りです。私達の回りには当たり前と思っっていることが多過ぎて、おれがおれが！と生きています。それは強く生きることでは決してないのです。本当に強く生きる力は感謝の心なだけでは生まれてこないのです。

午後は清沢満之先生のお言葉「天命に安んじて人事をつくす」をお伝えしました。喜びも深い悲しみもすべて受け入れて、その中で一生懸命生きていくということです。感謝に気付く心を失わず、どんな不安も受け入れて、その上に立ってしっかりと生きていく。そんな生き方を少しでも出来たらと、法話をさせていただきますながら自分に強く感じる一日でした。拙い法話に沢山の方にいらしていただき、心から感謝申し上げます。



東別院対面式

2012.11.23

仏恩報謝

若院 吉田昌史

「弥陀の尊号となえつつ 信楽まことにうる
ひとは 憶念の心つねにして 仏恩報ずるお
もいあり」 親鸞聖人御和讃(『正像末和讃』)
で、このようにお詠みになっています。「信楽
まことにうるひとは 憶念の心つねにして」
仏様を信じて願うことを常に忘れなければ、
その御恩に報いたいという気持ちがあふれ
いてくるものである。この報いたいという心
の表れこそが、「弥陀の名号」であり「南無阿

弥陀仏」ただそれだけであります。「死」という
ものを、できるだけ遠ざけて、考えないように
日々を生きている私たち。誰でも必ず訪れるもの
なのに、いざ「死」を目の前にすると、まるで特
別のものを見るように感じてしまう。「死」の苦
しみから救ってくださる阿弥陀様の光は常に照
らされているのに、私たちは、「死」を遠ざける
ことによつて、それに気付いてすらいません。仏
恩報謝の御念仏をいただく生活こそが、「死」と
少しでも向き合うことだと思えます。

平成25年(2013年)安楽寺法要日程

- 一月一日(火) 午前十時 修正会
新年初参り
- 一月十三日(日) 午前十時 為麿塚法要
しめ縄などお勤めし焼却します
- 二月十三日(水) 午前・午後
定例法話 北條義信師
- 三月十三日(水) 午前・午後
定例法話 野呂美道師
- 四月十三日(土) 午前・午後
定例法話 藤井秀規師
- 五月十三日(月) 午前十時・午後一時半
春季永代経法要 椰野明仁師
亡き人を偲び、仏法聴聞が子孫に代々
伝えられることを願ってお勤めします。
- 六月十三日(木) 午前・午後
定例法話 荒山 修師
- 七月十三日(土) 午前・午後
定例法話 八神正信師
- 八月 四日(日) 午前・午後
孟蘭盆会法要 住職
- 九月十三日(金) 午前十時・午後一時半
秋季永代経法要 榎山正樹師
- 十月十三日(日) 午前十時
定例法話 坊守
- 十一月十二日(火) 午後一時半 帰敬式
午後三時半 御伝鈔
- 十一月十三日(水) 午前十時・午後一時半
報恩講法要 荒山 修師
親鸞聖人やお念仏の教えに生きた先
人の恩徳に感謝しお勤めいたします
- 十二月十三日(金) 午前・午後
定例法話 八神正信師

帰敬式を行いました



安楽寺本堂にて

生きていくことが当たり前ではなく、今、生
かされている自分に感謝すること、感謝する
気持ちを常に忘れなければ、いざ「死」を
迎えるとき、「生まれてきて本当によかった」
と感じられるのではないのでしょうか。

昨年、十一月の報恩講法要には、大
勢のご門徒の皆様にご参詣頂き有難う
ございました。十二日の帰敬式には、
五名の皆様に受式頂きました。

全員で『三帰依文』を称えた後、剃
刀の式を行い、お一人づつに法名を伝
達。受式者代表の大河内さんから「誓
いのことば」を頂き、全員で正信偈を
お勤めし式を終えました。

仏教豆知識

第十三回



六曜について

先勝・友引・先負・仏滅・大安・赤口の六つを、「六曜」といいます。六曜は、結婚式などの慶事の時は「大安」がよい、お葬式は「友引」を避ける・など主に冠婚葬祭などの儀式に結び付けて使用されています。

また、先勝・先負や仏滅なども生活の中に深く入り込んでいます。特に「仏滅」「友引」というと仏事と関わりのありそうな言葉ですが、仏教とは一切関係がありません。親鸞聖人は、「日の良し悪しを選ぶことはよくありません」と、強く戒められています。お葬式の時に、亡き人(死)を穢れているとして「清め塩」で祓うという悪しき慣習(いわゆる先祖からの習わし、地域のしきたり)に繋がる誤った考えだと思えます。

「友引」は、先勝と先負のあいだにあり、かつて「勝負なき日と知るべし」と言われ、何事も引き分けになる、つまり「共引」とされており、現在のようない味はありませんでした。また「仏滅」は、以前「空亡」「物滅」とも表現されていたが、江戸時代末から明治時代になって「仏」の字が当てられたものです。

六曜は、中世期のころ、中国から伝来したと言われています。しかし、当時とは意味合いが大きく違ったものになっています。合理的考え方の現在の日本人の中でも、「六曜占いや迷信」は、生き続けています。決して惑わされることなく、正しく物事を判断し行動することが大切なことです。

お知らせ

安楽寺会館は、竣工から今年で十五年になります。先日総代会を開催し、外壁などの修理を行なうことになりました。四月以降に実施する予定ですので、ご不便をおかけしますが、宜しくお願い致します。

昨年暮れは、世の中に大きな動きがありました。政権政党が変わり、経済・外交・教育・年金・農業などの分野で、今までとは違う政策が出てくることが予想されます。こうした政策を、産業界では期待する向きがあります。庶民一人一人が、前向きに生活できる世の中になっていく政策が出されることを願います。

昨年につき、十二月二十二日から一週間「福島と名古屋をむすぶこども会」で来名され、ホームステイで交流を深められました。原発事故によって故郷に戻れない福島の皆様が、生きる希望を持てるような目に見える政策の実行を政治にも強く求めたいと思えます。